手で仕事する

奥村　健人

私の家では、慣行農業を行っている。愛農とは正反対の農業の形である。

　私の家には機械がたくさんある。トラクター、フォークリフト、大根洗い機や選別機、スイカ磨き機、箱を作る製函機、農薬散布機、肥料散布機、堆肥撒き機などなど。そういう機械と共に私は手袋を使う。家では作業の内容によって、3種類もの手袋を使い分けていて、ほぼすべての作業で手袋をはめていた。

　日本で農業の機械化が進んだのは、第2次世界大戦後のことだ。農薬や化学肥料を使った農作物の大量生産が一気に広がり、緑の革命と呼ばれた。

　私の祖父の話では、私の家ではその当時、周りの家よりも先に機械を導入し、出荷量も多かったらしい。私も小さいころから機械を使う祖父や、父のそばで過ごし、機械を使う、また農薬や化学肥料を使った農業の姿を見てきた。いつしか私も手袋をはめ、畑に入り、機械と共に働いたり、ついには機械を使いこなすようにもなった。

　そんな観光農家で育った私がある時、有機農業に出会った。最初の出会いは中学2年の12月頃だったと思う。中学卒業後の進路は地元の農業高校に行きたいというのが小学生の時からの思いだった。しかし、実際にその学校に行ってみて、私はその学校の魅力をあまり感じ取れなかった。そこから私はいろいろな農業高校を調べ始めた。その中で愛農高校を見つけた。しかし、その当時私は有機農業というものに興味はなく、有機農業を教えていることを知ってそのホームページを閉じた。今思えばそれが有機農業との最初の出会いだった。

　それから数か月後の2020年3月、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、全国で一斉休校が行われた。その時に私は家で手袋をはめて作業をするか、路について調べていた。その中でなぜかもう一度愛農高校のホームページを開いた。そのとき私は、初めて有機農業というものに興味を持った。それは、休校期間中に畑にたくさん行って、機械を操作することや、作業のスピードとは違った畑で働く楽しさを感じ始めていたからだと思う。また、そのころ祖父が年を取ってきてそれまでよりも除草剤を使用する頻度が多くなり、それにより除草剤がかかって野菜が枯れるなどのトラブルが多くなったのも有機農業について考えるきっかけだったと思う。

　そういった経緯があり、私は愛農高校にやってきた。愛農高校と私の家の農業とは、そもそも農業の形態が違っていた。また、土地が違えば、畑の様子や気候も違う。私はこれまでやってきた家での作業の経験が通用せず戸惑った。愛農高校では手作業でできることは手作業でするという考えが強く、ある機械といえばローダーやフォークリフト、トラクターや田植え機、コンバイン、草刈り機といった人がやるには厳しい作業やあまりにも時間のかかる作業を担うものばかりだった。

　今私は野菜部に所属している。野菜部では、多くの作業を手作業で行っていて、種まきも、畝をきれいに整地するときも、マルチを張る時も、定植するときも、除草するときも基本、手。収穫するときや、洗うとき、袋に入れる時もすべて手。これが野菜部の仕事の仕方だ。これは野菜部が有機農業で、もっと言えば少量多品目で野菜を生産しているからで、農業の機械化が進む前まで、私の家をはじめ多くの農家がこのように手作業で農業を行っていたのだろう。

　しかし一方で、最近スマート農業という言葉が注目されてきている。愛農に入る前の私は機械にも魅力を感じており、スマート農業にも興味を持っていた。最新のスマート農業の世界では、さっき言った野菜部の仕事のほぼすべてを機械が行ってくれるのだ。しかも作業によってはほぼすべてを機械が自動で行ってくれるものもある。人が鍬も何も持たずに畑に来て、手元のスイッチ一つで野菜を生産できる世界が近いうちに来るのかもしれない。

　しかし、愛農高校に来てみて、手で作業して私は思った。そんな農業面白くない。人がほぼ何もしないで野菜を作って、それを出荷して稼いでいくというのは人間中心のように思えてくる。私が畑で伸びきった草を取りながら思うことは、この草にも名前があって一生懸命生きているということ。この草がしっかりと根を張って土が柔らかくなる。そしてこの草を刈り取ることにより、他の生き物の食べ物になったり、分解されて次の植物の栄養になったりする。意味があってここに生えているということを感じる。

　先日、実家に帰省して手袋せずに仕事を手伝ってみた。そこで私はそれまで私は家で作っている野菜を同じ生き物だと感じていなかったことに気が付いた。一日に何千本も大根を取って、次から次へ洗い、箱に詰めていく。一生懸命育った同じ生き物である野菜を人は手袋越しに畑から引き抜いていく。

　私はいま、基本的に手袋をせずに作業を行っている。手袋越しではなく、自分の手で野菜と付き合っていきたい。これが私の思いだ。もちろん、機械を操作するときや、危険が伴うときは手袋をする必要がある。しかし、同じ生き物である野菜と付き合うときに、手袋をするのは一生懸命育った野菜に申し訳ないと感じる。

　これからも私は手で作業して生きたい。たとえ何があっても、私たちを生かしてくれる野菜や植物に感謝していきたいし、そんな野菜とこの手を通して向き合っていきたいと思っている。